

解説

鈴木克己



黒い九月、この組織が初めて朝日年鑑に掲載されたのが一九七二年版。七一年十一月「タール首相はカイロで」「暗黒の九月組織」と名乗

るゲリラに暗殺され、アハメド・ラウジ新内閣が発足した」と中東情勢の項目に記された。翌年ミュンヘン・オリンピックのテロでは「黒い九月」との表記になり、事件の詳細が記述されている。

シエルコ・ファタハ (Shekko Fatah) の長編小説『黒い九月 (Schwarzer September)』もこのヨルダンの首相暗殺のシーンから始まる。しかし、それに続くシーンではミュンヘン・オリンピックのテロはすでに過去のこととなっている。ステイブ・スピルバークの映画『ミュンヘン (Munich)』(二〇〇五年) のようなスリルとサスペンスをこの小説に期待してはならない。主人公のアラブ人青年ズィヤードはC-

Aに情報を流す一方で、テロリストグループ「黒い九月」に繋がっていた。しかしエピソードでの米国大使館爆破事件を除けば、彼自身が大事業に絡むことはない。命ぜられるままに行動する彼自身は、自分が何にどのように関与しているかわからないでいる。このズィヤードを使うCIAの担当官ヴィクターも国家の命運に関わる大仕事に携わることなく、ルーティンジョブに明け暮れる。彼にとっては秩序を保つことが重要であった。しかし微妙なバランスで保たれていたレバノンの平和が崩れ始めるとますます彼の出番が減っていく。

小説の中盤からはドイツ赤軍派の青年たちも登場し、レバノンを取り巻く状況の複雑さが露呈する。彼らは東ドイツの国家保安省、いわゆるシュタージを通してレバノンに乗り込み、訓練施設に入る。中東から遠く離れたドイツで熱く語った議論は、目の前で人が死に、あるいは自分が思想のために人を殺す段になると、その信念が揺らぎ始める。「お前はなぜここにいるのだ」。答えを見つけれないまま一人は殺され、一人は転向してゆく。

「お前はなぜここにいるのだ」という問いは、ズィヤードの中でも大きく膨らみ始める。仲間だと思っていた人が殺される。初めのうちはその理由が彼にはわからないが、徐々にその背景が明かされる。しかし背景が分かっただら

かって自分がそこにいる答えが見つかるはずもない。あるときレバノン・シリア派の指導者の言葉が、彼の心を掴む。「君たちが何者であるうと、我々はみんな神の一派なのだ」。これまで宗教とは縁のなかったズィヤードにとっても、それほどの意味があったのだろうか。同じ神を崇拜するもの同士が殺し合うレバノン内戦下で、流れ流されたどり着いた幻想だったのかもしれない。

クルド系イラク人を父に、ドイツ人を母に一九六四年東ベルリンに生まれたシエルコ・ファタハは、東西冷戦期に家族と共にウイーンを経由して西ベルリンに移住する。社会主義陣営の東ドイツに生まれながら容易に西側へ移住できたのは父親がイラク人だったからだ。また幼少期よりイラクとの行き来ができたのにも父親の存在が欠かせなかった。イラン・イラク・トルコの国境地帯で密貿易を続ける男を主人公にした小説『国境地帯 (Im Grenzland)』(二〇〇一年) で作家デビューしたファタハは、その後も中東、とりわけイラクを舞台にした小説を執筆している。本作でもイラクを舞台とするエピソードが随所に現れるのは、ファタハの強みの一つなのだろう。それはまた父の国を知ろうとするファタハの、父へのオマージュなのだ。

ドイツ語を母語としないドイツ語作家に贈られていたアーデルベルト・フォン・シャミッツ

賞を二〇一五年に彼が受賞したのは、その選考基準の変更に起因した。ファタハのようにドイツ語を母語としても、言語や文化の混交というものがテーマ化されたり、文体に顕著に現れていたりする作品も、賞選考の対象となった。

受賞の前年、イラクで文化財保護活動をするドイツ人とその通訳の現地人の誘拐事件を扱った小説『最後の地 (Der letzte Ort)』(二〇一四年)を出版すると、ファタハは次作への長い準備期間に入る。そして五年を経て七作目の本作、『黒い九月』が発表される。

レバノンで成長したパレスチナ難民の主人公ズィヤードは、難民だからと言ってパレスチナの解放に命を懸けることはない。つまり彼は強い信念に従って行動しているわけではない。その時々状況に流され、仕方なくそうせざるを得なくなるのだ。これは二〇一一年に発表された長編小説『白い大地 (ein weisses Land)』の主人公アンワルの行動原理と同じだ。第二次世界大戦に投げ込まれたアンワル同様に、ズィヤードは七〇年代のテロの中に身を置くことになる。

『白い大地』は、一九五〇年代半ばのユダヤ人のイスラエル移住の場面で終わる。その出国最終便でユダヤ人をサポートしていたのが主人公の旧友のユダヤ人だった。ユダヤ人がイラクを出国することになるその背景にはパレスチナ

難民問題があった。イスラエル建国にともなう民族浄化によって生まれたパレスチナ難民に関して、彼らが故郷に帰還できない場合は、イラクのユダヤ人を国外追放するとの政策が宣言されていたのだ。パレスチナ難民問題を露見させて終わらせた『白い大地』。パレスチナ難民問題に端を発する『黒い九月』。

面白いことに、『白い大地』の主人公アンワルと第二次大戦中に彼をドイツへと送り込んだ将校ニダールが、『黒い九月』にも顔を出す。「イラクに自由な奴などいない」とかつて豪語していたニダールが、ここでも「忠誠なんてとても危険なものかもしれんぞ」と皮肉を込めて言っている。イラク革命によって国王と共に殺害された前首相を念頭に置いた発言だったが、どこか小説全編に通じるような趣がある。

本書は二部から構成されている(全三七九ページ)。章分けは改ページによるのみで、各章に番号や見出しは付されていない。訳出箇所は第一部第一章冒頭から第五章の終りまで(十一ページから四九ページ)。訳出にあたって、章分けの改ページは行わず、行間を二行空けた。